The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『徒然草』における中国思想受容の研究 ： 無常観との関わりを視点として
Author(s)	陳, 秉珊
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49105
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	陳（チン）　　秉（ヘイ）　珊（サン）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１５３４　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 19 年 9 月 26 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**『徒然草』における中国思想受容の研究－無常観との関わりを視点として－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　荒木　　浩 （副査） 教　授　飯倉　洋一　　准教授　加藤　洋介

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、『徒然草』の中国思想受容の問題を、特に『荘子』と『易経』との関係に焦点をしぼって考察しようとするものである。第一篇「『徒然草』における『荘子』受容の再考」と第二篇「『徒然草』における『易経』受容の再考」の二篇から構成される、400 字詰め原稿用紙およそ 320 枚程度の論文である。

第一篇は、『徒然草』における『荘子』受容の問題を、本文のみならずその注疏の理解まで追いかけ、特に『南華真経注疏』という書物の受容に注目するもので、四章から構成される。『南華真経注疏』は、晋の郭象の注に、成玄英が付した疏によって成っており、日本では、平安期以降、鎌倉・室町期においては、『荘子』理解の中心的な位置を占めていたとおぼしい注釈書である。申請者は、第一章「『徒然草』第七段と『荘子』再考－「夏の蝉」をめぐって－」において、『徒然草』第七段の「夏の蝉の春秋を知らぬもあるぞかし」という『荘子』に典拠を持つ句を、神田秀夫の先駆的な指摘に導かれつつも、『南華真経注疏』の思想理解をより深めて確認する。第二章「『徒然草』第三十八段における「荘子」受容考－「智」を手懸かりとして－」では『徒然草』三十八段に見える「智」という語をめぐって、また第三章「『徒然草』第九十七段における「荘子」再考」では、荘子の思想と、「仁義」、「仏法」を虱、鼠、賊と同等に扱っておとしめるような表現を持つ『徒然草』第九十七段の思想的共通性について、それぞれ『南華真経注疏』との関係を論じる。そして第四章「『徒然草』第二百十七段と荘子の「斉物論」－「大欲は無欲に似たり」をめぐって－」においては、『徒然草』第二百十七段における大福長者の描出とそこから導き出される箴言「大欲は無欲に似たり」という表現の周辺をさぐり、それが、『南華真経注疏』よって兼好が『荘子』を捉え、批判的に理解し、その表現に資したものであることを明かしつつ説明していくのである。

第二篇は、儒教の宋学的理解に注目し、特に『徒然草』における『易経』思想の受容についての研究を中心に据える。第一章「『徒然草』第九十一段における「理」一考－『易経』とのかかわりを中心に－」においては、『易経』の変化の理の論理とそのとらえ方の推移に注目し、『易経』の宋学的理解においては、「易」を「無常」と捉えること、そしてその理解が『徒然草』の無常観の仏教からの逸脱と重なる部分があることを論じていく。第二章「『徒然草』第八十三段における「易経」－「亢竜の悔あり」をめぐって－』では、『徒然草』第八十三段の「亢竜の悔あり」という、『易経』由来の表現が、従来指摘されてきたような『史記』などからの単なる孫引きではなく、直接的に『易経』の思想を理解し、その宋学的な「変化の理」への肯定的理解を踏まえて、『徒然草』の思想が形成されているこ

とを述べる。

冒頭には序章を付して全体を俯瞰し、末尾には終章を添えて、論文の総括に換えている。

論文審査の結果の要旨

『徒然草』がどのような思想に立脚し、また時代とどのように関わったのか、というのは、仏教に限定して考えても、必ずしも明らかでないところが多い。江戸時代以来の研究史は相応に蓄積されながら、『徒然草』が極めて多様な思想のコンテクストを抱え込んでいることもあり、輪郭は示されながらも、文献学的には解明されていない問題も多い。中国思想についても、鎌倉から南北朝にかけての時代思潮としての漢籍受容の詳細は輪郭が明かされつつはあるものの、具体的に兼好のような出自の人物が、どのような教養を有し、また関東との関わりや宋学、禅宗など、新しい学問の思潮に触れ、具体的にどのような書物を手にし、いかなる修学を行い、どのような注釈などの理解に立脚して受容していったのか、ということは、今後の精読を待つ部分が多いのである。申請者の研究は、中国思想研究の新しい成果を取り入れるなど、これまで日本人研究者が追いかけきれなかった最新研究を援用しながら、思想研究のコンテクストから『徒然草』の世界を照射しようとする意欲的な試みであり、研究史に刺激を与えるものとなることが期待される。

特に『南華真経注疏』への着目は、『荘子』受容をめぐって、重要な視点である。申請者は、同書には、『荘子』の注釈ながら仏教的要素が色濃く取り込まれている点を指摘し、その注説を分析する。その視点は、『徒然草』の思想形成を考察する上で、重要な視座を提供するだろう。また『易経』の宋学的理解への注目は、これまで注意されてきた『徒然草』と儒教思想の関係に、多くのヒントを残すものである。そしてまた、『荘子』と『易経』と、それぞれのコンテクストに見える、仏教とは異なる意味での「無常」という語とその理解への着目は、申請者の研究の注目すべき点である。

ただ、問題がないわけではない。申請者の方法は時に、『徒然草』の出典研究であるよりは、類似表現をめぐる、比較対照研究に近い面もある。今後は、『荘子』や『易経』注釈書の具体的享受の様相を、日本の中世の資料を渉猟して追跡し、『南華真経注疏』自体の伝本や受容についても研究を拡げ、また当時の漢籍理解の多層を分析し、類書などをも視野に入れた、幅広い文献の対比を行い、柔軟な思考をもって、より精緻な『徒然草』出典研究に進むことが期待される。同時に『徒然草』自体の読解にもより一層の深まりがほしいところでもある。論文の文章表現についても、一層の研鑽を望むものである。

このように、指摘すべき問題点はいまだ残されているが、本論文はすでに学術誌に収録された論文が三本、学会発表を行ったものが一本含まれており、新しい視点の研究として、今後の検証を含め、学会に益するところも大きい。多様な側面を有する中世文学の精華『徒然草』の分析には、申請者が試みようとするような思想書類への分析が、今後も継続して行われなければならない。今後の精進と展開を期待するところである。これらにより、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。